

府市トップミーティング

日時： 令和6年4月11日（木）11:00～11:40

場所： 京都府公館（レセプションホール）

○西脇知事

それでは時間になりましたので、始めさせていただきたいと思います。

京都市松井孝治新市長が誕生されて、議会も終了し、年度初めになりましたので、できる限り早く府市協調について、市長との意見交換をしたいという思いがございまして、今日に至ったわけでございます。

今日は今後の府市協調の進め方、こうした会談の進め方も含めて、松井新市長とごっくばらんにお話をしたいと思います。どうかよろしくお願いします。

○松井市長

よろしくお願いいいたします。初めてこの公館のレセプションホールに入らせていただきました。素晴らしい施設で感動しております。ありがとうございます。私の就任後、一月半ですが、こういう形で早々に知事からお迎えをいただいて、府市の知事と市長がフランクにお話をできる機会をいただいたことは大変光栄だと思っておりますし、今日は楽しみにしております。よろしくお願いいいたします。

○西脇知事

ありがとうございます。最初に府市協調の経過を少し申し上げますと、京都府は新しい総合計画の中で、2040年に「一人ひとりの夢や希望が全ての地域で実現できる京都府」というのを目標にし、一昨年の12月に改定した総合計画では、あたたかい京都づくりを進めています。ただそのためには、人口の約6割を占める京都市との連携は不可欠だということです。

昭和53年、45年近く前になりますが、林田府政誕生以来、京都府、京都市のトップが直接に懇談をして府市協調に取り組んできました。しかもこれは行政のトップですけれども、経済界も含めてオール京都の皆さんがやはり京都府・京都市の連携をぜひひともして欲しいという、おそらく強い思いの中で実現してきたということです。

これまでの府市協調の意義を申し上げますと、二重行政の解消、行政の効率化ということと、それから府民、市民へのサービスの向上や満足度の向上、そしてあと政策効果の最大化。3つ目がやっぱり、京都府と京都市が核となってそこに経済界、文化関係、府民市民の皆様をはじめオール京都で取り組むことによって大きな施策展開が可能となります。そうした3つということで、私も6年前からの門川前市長との中では、経済センターの開設や文化庁京都移転の実現、それから何といても4年に渡る新型コロナウイルス感染症への対応。インフラ系で言いますと、山科の安祥寺川と四

宮川の連携による治水対策みたいなそういうこともやってきました。ただここに来て、社会経済情勢をめぐる状況も非常に流動していますし、課題も様々複雑化するので、今までの府市協調の成果もきちっと活かしながら、一段レベルの高い府市協調ができないかということで、それはおそらく京都以外の自治体を巻き込むとか国とか、場合によっては国際的な連携も含め、そうしたことができないかという思いで、今日会談をさせていただきたいということで、まずはそのあたりについて、松井新市長に府市協調について、選挙の公約でもおっしゃっていましたが、お聞かせいただければありがたいと思います。

○松井市長

ありがとうございます。門川前市長と本当に緊密な関係で、いろんな成果を上げてこられたというのは私も選挙のときから、それをさらに継続して発展させていかなければならないと。そのためにも選挙でも訴えさせていただき、先ほど言いましたように、就任後一月半で「とにかくお会いして話をしようじゃないか」という形で開催できたのは本当に府庁と市役所の両事務方の皆さんにも感謝したいと思います。

会談も年に1回というのは、今まさに知事がおっしゃったように経済社会情勢も刻々いろんな課題が出てきたりしており、やはり機動的に開催して、時期もあまり決めず、事務方も含めて我々もしょっちゅういろんなところでお会いしているので、こうやって府と市がしっかりと向き合って、府民市民の課題について議論する場を随時設けるという方が、しゃちこぼってこんな大玉を解決しましたということを目的とせず、しかし、節目節目で様々な課題もある中で、機動的に議論できるというのが、より成熟した関係かなと思っております。そういう意味では、その都度、テーマをあらかじめ決めてそれができるかどうか、あるいは府市協調が進んでいるといっても長年の懸案があり、それが解決しなければできないのかということではない形で、合意した事項についてその時々的重要なテーマはいくつもあるため、合意したことを実行に移すことを加速するというような機会ができれば意味があるし、私の市長選の時から知事におっしゃっていただいている一段レベルの高い府市協調は、そういうことかなと私は解釈しているんですが、いかがでしょうか。

○西脇知事

ありがとうございます。確かに年1回となるとそれをやること自体が目的になったり、そのために1年間で課題を溜めているわけではないので、本当に必要なことがあれば緊急的にもやらなければならない場合もあります。それから単に具体的な施策の合意だけではなく、そのときのいろんな問題意識も話し合うという意味では、市長の提案通り、ある程度年に数回やるということと、それによりできる限り具体的な施策の効果が出るよう、実効性のあるようなものになりたいという思いがあります。それで別に名称にこだわるわけではないですが、「府市懇談会」というと、今までやってきた府市懇談会の歴史もあるので、この際、会談の名称も「府市トップミーティング」

など、もう少しざっくりばらんな話ができるような形の名前に変えたいと思いますが、このあたりはどうですか。

○松井市長

それに賛成させていただきます。

○西脇知事

ありがとうございます。まず冒頭は知事と市長との会談・意見交換ということについて、進め方を今の提案で整理をさせていただきますと、今までのように、年1回ということではなく、「年に数回、機動的に開催をするということ」、「できる限りの実効性を持たせるような施策は府民市民の皆様はその効果を届けるということ」から、「合意した事項は速やかに実行に移す」。このような趣旨から名称については、「府市トップミーティング」にさせていただきたいということをもって、今日はそのスタートとさせていただきたいと思っております。

進め方については以上ですけれども、これからそういう形で随時意見交換をしますが、せっかく市長と私が揃っており、事務方もいますので、参考になるという意味も込めて、今後どんなテーマでどんな意見交換をしていけばいいかということについて、まずは口火を切っていただければと思います。

○松井市長

先輩の胸を借りて口火を切らせていただきます。やはり季節がら桜のシーズンということで、これは知事や私もいろんな市民からご意見をいただいているわけですが、やはり観光集中の問題をどう考えるかというのは、一番今の季節で我々が考えさせられます。そこに関して、我々も6月頭から観光特急バスを走らせるとか、混雑回避や観光客の皆さんのマナーの改善への働きかけ、ごみ箱について新しいシステムを設けるなど、こうした問題をどう軽減するかということをやっています。

今回、私が思うのは、「観光」という考え方、これは京都のまちの成り立ちとも関わりますが、観光と言うと名所旧跡を回る。私の家業もそうですが、例えば1泊2日とか2泊3日のお客様を受け入れて、新幹線も含めて便利ですから、場合によっては日帰りの方々も関西圏全域から来られます。そういう方々がぱっぱぱつといくつかの名所旧跡を回られ、やっぱりここは見ておきたいという名所旧跡に集中する。それが地域的な集中となると、日々の統計はないですが、人口3万5000人の東山に年間5000万人の観光客のうち、その半分以上が来られる。それだけ大勢の方々が来られ、特定のエリア、これは東山に限らず嵐山などいくつかの集中するエリア、これをどう分散していただくか、あるいは京のまちの作りから言っても、本来の観光は名所を見るだけではなく、その土地の生活様式や風物などを見ていただくというのが中国の古典に由来する本来の意味での観光という言葉だと思います。私自身、観光の考え方をもう少し視野を広げて、先ほど知事も周遊していただくことをおっしゃっていましたが、文化首都は私の選挙の時もテーマになっていましたので、文化のあり方にもかか

るかもしれませんが、京都は歴史的建造物や寺社といった素晴らしいもの、世界遺産、国宝などがたくさんあります。そのスポットだけではなく、文化というのは生活文化であり、長年にわたって京都のまちの人々が育んできた生活のライフスタイルであり、それが京都のまちと一体となっているのが京都の素晴らしい文化だと思います。それをどう、外の人にも味わっていただくか、まち自体を観光都市という言葉を使う人と使わない人がいますが、文化観光都市と言い換えてもよいかもしれません。過去からもいろいろおっしゃっている話だと思いますが、どういうお客様にどういう経験をしていただくのがいいのかというところを少し見直して、考え方や発信の仕方も変えていった方がいいのかなと思っています。

○西脇知事

ありがとうございます。実は京都府も「もうひとつの京都」ということを地域ブランドのイメージ戦略として作っており、海の京都、森の京都、お茶の京都、竹の里・乙訓とやっております。特にその中で昨年、竹の里・乙訓というと乙訓地域だけでしたが、実は京都市の西山と隣接しており、これを一体として地域イメージを出してもらいたいということで、これは京都府だけで考えていたら出なかった発想。京都西山竹の里・乙訓ということで、昨年度インバウンド向けのモニターツアーを実施し、今年度すでに商品化されています。これは府市連携の周遊観光の1つの典型例です。それで例えば、山科から醍醐、宇治に行くようなラインもあるし、もう少し西に来れば、東福寺、伏見稲荷、桃山、宇治に行くようなラインもある。あと、美山と京北の関係など。そうした「とっておきの京都」と「もうひとつの京都」の連携もある。もう一つは、京都府域全体で、京都市内に泊まる方がそのあと京都府域へ。それが結局は滞在日数を延ばすようなことにもなると思う。魅力があるのは間違いないので、いろんなやり方があると思います。

それから、単なるインスタ映えするところに行って、写真を次々に撮っていくようなことでは、今市長がおっしゃったような深みのある観光にはならない。実際インバウンド観光客が、我々が今まであまり目にしなかったところで散歩をされているところを見かけることがあり、観光客の方も少し変わってきているのかなと感じ、よりいろんな魅力を発見するということについては進んでいるのかなと思いますので、ここは観光政策の中でやっていきたい。特に周遊については、できる限り一緒にやっていった方がいいところがあるかと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

あと観光については、今日は時間がないので触れませんが、人手不足や人材の育成というテーマもあるので、これは全体的に人材不足ではありますが、特に観光分野の人材育成については、ぜひとも一緒にやっていきたいと思ひます。

時間の関係で次に移ると、文化庁が昨年3月に移転してきて、それを契機に文化観光推進本部が長官直轄でできておりますので、やっぱり観光と文化というのは切って

も切れないです。現にお隣の中国では、文化と観光のセクションの省庁が合併したんですね。だから、「文化首都・京都」ということを我々も言っているし、市長も選挙でお話されていましたが、その文化の取組について、何かお考えなどがあればよろしくお願いします。

○松井市長

はい、ありがとうございます。おっしゃる通りですね、観光についての考え方を変えるときに、我々自身がどういうまちとして、どのように京都で過ごしていただきたいのかということ、我々の価値観ももうちょっと出していって、もちろんお客様たちがどんな過ごし方をするかということで、我々が押し付けるわけにはいかないんですが。最近のライフスタイルで言うと、最近、知り合いの人が、月に1週間、京都でリモートワークをしながら、その前後の朝夕の時間、あるいは1週間いるけれど、1週間のうち5日間は仕事をするけど、残り2日間は休みを取って、そこで京都で習い事をしておられる。それは何かというと、生け花をしたり、京都の歳時記を学ぶ、その季節、季節の京都で、今月は生け花をしたり、今月は例えば笙に取り組んでみましょうとか、そういう形で、本当に京都で暮らすように、京都で仕事をしながら京都の生活文化というものを味わっていただく。神社仏閣はこれももちろん素晴らしい、お庭ももちろん素晴らしいが、そこを訪ねるということだけではなく、京都人が味わうようにいろんな伝統文化を味わう。あるいは、例えば西陣織の現場に行ってみて、どのように作られているのか見てみる、染めの現場に行ってみる、あるいはもっとポップカルチャーの現場のイベントに参加してみるなど。もちろん文化財保護は大事ですし、いろんな芸術文化の振興もすごく大事ですが、同時に京都の人々が暮らしているこの暮らし向きやライフスタイルみたいなものを多くの人にじっくりと体験してもらって、我々から見たらその我々の生活文化自身も、外部の人たちが滞在していただくことによって、外の目も入れて磨いていくという、この部分はすごく大事だと思っています。

ひょっとしたら京都というまちのライフスタイルをもう一回我々が見直し、中長期的に言えばもっと多くの人たちが、より多くの人たちが、人口減少対策は、知事も私もずっと言っていることですし。より多くの人たちが若い人だけではなく、年配シニア層まで含めて京都で過ごしていただく。フルに京都に移住してもらうのは我々としても歓迎ですけど、それだけじゃなくて、分住とか半住みたいな形で、京都で一定期間、長い時間滞在していただいて、もちろん消費もしていただく、文化的な支えにもなっていただくというようなことは大事な課題かなと思っています。

○西脇知事

ありがとうございます。文化は幅が広く、これを語ると範囲が広がるんですが、やっぱり我々は常に京都の魅力の源泉は、千年を超えて受け継がれてきた文化が今も生活に根づいていると、ただ、段々とライフスタイルが変わったり、地域コミュニテ

ィが若干衰退するなど、いろんところでその生活文化にも少し懸念はあります。しかし、他の国内の地域に比べれば圧倒的に生活において我々も歳時記で、今でもやっぱり季節をそれぞれの行催事で感じている。それをどうやって生かしていくのかということで、今市長のおっしゃるように、観光客など外から来られた方にもそれを味わっていただけるベースがある。生活文化を支えていくことは実は非常に重要であり、それが観光にも繋がるし、若者定着として京都を愛してもらい、大学生などに京都を愛してもらいベースにもなっているのではないかと考えており、ここはしっかりと繋いでいかなきゃいけないと思っています。

それと先ほどの（観光で）忘れており、付け足しになりますが、オーバーツーリズムの中で一つは交通については、市長もいろいろ工夫されておりますが、私も去年、嵯峨野線の件を含めて、JRの方には、自らかなり強く要望して嵯峨野線は戻りましたが、やはり交通の問題というのは我々も一緒に解決しなきゃいけないこともあります。そこは市民生活の関係で我々の目指している持続可能な観光という面からも大事であり、先ほど言い忘れましたので付け足します。

それで、生活文化という中で今ちょっと話が出ましたが、伝統産業も当然その中に入っています。これこそ後継者がいなくて大変ですけれども、やっぱりそれもまちの魅力の中の1つになっているので、産業の話に移らせていただきたいんですけど、まず伝統産業についてお聞きかせいただけますか。

○松井市長

はい。この前、西陣織工業組合さんをご挨拶に来られて、知事のところにも行かれていますと思いますが、新しい体制になられて、いろいろ意見交換をしていたんですが、後継者不足が深刻で、一般的な大企業みたいなインターンシップはなかなか地域企業・中小企業の場合は個々の企業ではできないと。新しい理事長さんの話では、実はある美大と提携して、美大の人たちに現場を見てもらったところ、今までそういう経験をしてなかったと、やっぱり目を輝かせるらしいんですよ。ところが、それぞれの企業は、例えば3年に1人欠員が出たらそこで採用するというぐらいのことしかできておらず、それは10倍、20倍の競争率になったりするらしいんですね。だから、これを何とかもうちょっとコラボして、支援できないか。学生は、伝統産業はそもそも見ないわけですよ。私も3月まで大学の教員でしたが、学生は、みんな名のあるテレビコマーシャルを出しているようなスポンサー企業に、何十社もエントリーシートを出して、結局入ったはいいけど、なかなか3年、5年で思った仕事じゃないということで、たくさんの方々が辞めていく。もちろんそれはマッチングの結果ですし、市場が流動化していいこともたくさんありますが、やっぱり伝統産業に新しい目を、これは別に新人だけじゃないと思うのですが、目を向けてもらい、その人材とのマッチングやあるいは伝統産業に若い人の感性も入れて、新しいものをどう作っていくかがすごく大事。これは伝統産業だけではなく、我々もカルチャープレナーというのを、

これも京都府さんも同じですが、やっぱり日本の文化、京都の伝統文化を含めているんなカルチャーがあるので、それをアントレプレナーシップとどう結びつけていくか。ここで新しい分野が、京都ならではの新しい創業というのもできるかもしれないし、さらにその延長で言えばスタートアップをどう支援するか。京都は小中高の公立校がすごくレベルアップしたんですが、これをさらに大学につないで、そして大学からそのあとの就職とか創業に繋いでいくために、我々も、それこそ知事も私も頑張って企業誘致もやらなければならないと思いますが、既存企業を誘致するだけじゃなく、やっぱり新規のものにどうつないでいくか、その種というのは実は伝統産業をどう次の時代に進化させていくかというのもあるって、ここをシームレスに繋いでいく。あるいは何度もいろんな人が言うんですが、やっぱり受験勉強とか就職活動で、若い人たちのクリエイティビティが落ちていることを実感します。高校2年3年でクリエイティビティが落ちて、また、せっかく大学でクリエイティブな活動をガンガンやらせているのが、就職活動に入った瞬間に、何かエントリーシートを入れなあかんとか言って、えらいクリエイティビティが落ちる。これをできるだけリニア（一直線）に延ばすようなことを、これはそれこそ府市一体となってですね、小中、高大連携もそうですし、大学から実体経済、産業政策ってなってくるとどうしても広域ですから、府の力を我々は大いにお借りしなければいけないと思うのですが、我々もできることを一緒にやっていく。たくさんのお話を話して散らかったかもしれませんが、私の場合はそんなことをずっと繋がった思いがあります。

○西脇知事

ありがとうございます。まず、伝統産業から言うと、コロナのときにお仕事がないということで、西陣織と京友禅と丹後織物の3産地連携でシルクテキスタイルのコンソーシアムも作りました。今までは分業が行き過ぎていたが、丹後でもデザインをしたいとか、直接販売みたいなところも出てくるということで、新しい人が故郷へ戻ってきて商売するみたいなことがあるので、伝統産業にも若い発想とか力を入れていくことは非常に重要です。世界的に見たらシルクテキスタイルとしては、京都はすごいシェアの技術も製品の素晴らしさも誇っているんで、これは是非とも市長おっしゃるようにやっていきたいと思えます。

若者の話でいうと、若者定着の話もよくされていて、大学生で（定着率が）今17%ぐらい、これについて私と有識者の労働市場というかそういう雇用についての懇談会の中で、私がそれを言うと、「知事さん、何%ぐらいやったらいいんですか」と言われてね。「3割も残った場合に就職するところありますか」と言われると、「確かにそうですよね…」という話になる。それともう1つ出るのが、新卒で就職しなくても、京都を愛する、京都に大学生で生活したことがある人は必ず転勤希望で京都に来るとか、あと転職するときに京都の企業を選ぶだとか、所帯を持ったら京都など、そういうことをもっと目指すべきじゃないかみたいなこともあって、トータルに若者の定着があ

る。それとこの間、同志社の経済学部プログラミングの人たちと小学生にプログラムを教えにいったときに就職先を聞いたら、1人を除いて7、8人が全員、全部（就職先が）東京で、IT系でいうと、なかなか（京都で就職先が）ないんだみたいな話もあった。そういう意味では、産業も若干高度化した方がいいんじゃないかとも思っています。特に松井新市長は経済産業省出身ということで、経済界の方からも「知事さんと一緒に新しい産業政策に是非とも取り組んで欲しい」みたいなことで、今我々も産業創造リーディングゾーンとして府内10か所程度のところでやっていますが、例えば半導体関連の話も産業の今一番の喫緊の課題なので、京都にはかなりのベースもあるので、そういったことの集積を図るとか、そういう若者にとって魅力的な新産業創造、今スタートアップの話もありましたし、その辺りのことは、やっぱり1つ取り組まなきゃいけない。その辺はどうお考えですか。

○松井市長

それはぜひやらないかんですね。やっぱり熊本のあの活況。やっぱりファブ（生産拠点）も私は誘致できたら、電力インフラや用地、水の問題とか、これは相当性根を据えて関係事業者にも協力をお願いしなければいけない。あんまりおっとり構えているとね、それは知事も事業者名は出しませんが、やっぱりファブも取りに行かないといけません。だけど、やっぱりデザイン、半導体でいうとデザインセンターみたいな。海外人材も含めてそこで働く非常にクリエイティブな人達を。京都ってやっぱり魅力あるわけですよ。京都なら行っても良いという人は結構いるはず。それこそ府市それから国にも一緒に働きかけて、食欲にいかないと、今まで京都はおっとり構えているところがあり、僕らみたいに半分東京で暮らしてた人間は、京都はもう昔、それこそ府知事が全然違う体制だった頃は、「発展せんでええねん京都は」みたいなね、今はそんなことはもうないですけど、やっぱり食欲に取りに行くっていうことをしなければいけないと思います。

それからそのために京都っていうのは、今リーディングゾーンの話がありましたけど、この京都駅の東側、南側あたりにいくつか課題があったまちで新しいまちづくりに着手しているエリアがあります。やっぱりここはぜひ企業誘致、それから企業だけじゃなくて、クリエイティブな人材をそこに。今日もこの後、五条の南側に行くんですけど、やっぱりクリエイティブな人材がそこに住んでくれて、その方々がどこかで繋がっている。それはアーティストであったり、サイエンティストであったりという人たちがそこに住んでいるというのが、やっぱり京都の魅力というふうに。まち全体をもっと人材誘致、企業誘致。その人材誘致は100%来るってことじゃなくても、年に何か月か京都にいてもらって活動してもらおうような方々も含めて誘致していかなければいけない。それからやっぱり、京都に素晴らしい人材もいる。これは次のテーマに関わるかもしれませんが、やっぱりSTEAM教育みたいなものをどんどん広げていって、そのSTEAMの中にはマスマティシアンもいるし、サイエンティストもいるし、

エンジニアもいるし同時にアーティストもいるわけで、そういう方々が、京都の中で創発、いろんな活動面でお互いに刺激し合って新しいものを生み出すような、まちをつくっていくことによって、企業誘致もさらに立地企業にとっても「あ、魅力があるな」と。例えば、個別の企業名を出して申し訳ないのですが、ボスコン（ボストンコンサルティンググループ）みたいなのが京都に拠点を置いていただく。国際的にシェアがあるところが京都に拠点を置く。逆に京都の会社が、私シリコンバレーって言葉を出しましたが、例えばこの前、虎ノ門に行ってCIC ジャパンを見てきましたけど、やっぱりすごく賑わっているし、ボストンにも繋がっているんですね。そういう海外とも繋がって売り込めるし、向こうからもどんどん「京都というまちは見逃せないよね。アンテナ張っとかないといけないよね」っていうまちにしていけることも含めて、これは企業誘致から教育から、あるいは人材交流の拠点づくりとかいうところを含めて、たくさんやらないといけないかなと思っています。

○西脇知事

ありがとうございます。ボスコングループのコロナでできなかった開所式に私行きて、CEO も来られており、「CEO が京都に来る機会を作るために京都に拠点を置いた」と日本の責任者が挨拶してまして、私が CEO に「本当ですか」と聞いたら、「本当だ」と言っていました。やっぱり逆にその言葉でわかるように京都というのは、おそらくそのトータルな文化を背景としている魅力があるので、それも磨きながら、そういう個別の施策分野について、施策をやっていくというのが非常に重要であり、しかも効果が期待できるという意味ではこれも頑張らないといけない。

それで私は就任以来6年間、子育て環境日本一を先ほど市長からも紹介いただきましたが、そういう今人材や先ほどから出ております高大連携などいろいろ含めて、子育てと言えばもう一つ「教育」の分野が一つの大きなテーマですが、大学で教鞭をとってこれ、教育の分野にも一部参画された市長として、そのあたりについて何かお考えがあれば、よろしくお願いします。

○松井市長

これはですね、私やっぱり、私の前任者に対する本当にリスペクトを持っているのは、知事は小学校は国立ですよ。私は公立の小学校でしたが、そこから我々の時代はやっぱり私学に行く。私学に行きたくて行ったかといろいろありますが、もちろん魅力のある私学だったと思いますが、やっぱり公教育というのがこの30年間ぐらいで、私の前任であれば門川市長、それからその前任の梶本市長、このお2人を含めて、市役所一丸となって、教育委員会だけではなくやったと思うのですが、本当に小中学校がとてよくなって、同時にそれが高校に波及している。これはもう府立高校にしても市立高校にしても、今すごくレベルが上がっています。それも受験成績が上がっていることをよく言われますが、実は受験成績だけじゃなく、非常に探究型の学習というのが、それぞれの府立市立で前に進んでいる。ちょっとレベルが違う状況になっ

ており、私学に行っていた私から言うと、やっぱり公立で良い学校があるというのが一番いいですよ。まちとして。これをさらに大学レベルで、京大をはじめとして、同志社、立命、あるいは産大、龍谷といろんなところが今元気ですよ。これをしっかり高大連携にしていく。そのためにも高校レベルで私はその探究型というのをさらに一步レベルの高い探究型に。実を言うと私の実体験もあります、私が3月で卒業した慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスに中高があります。去年から中高生を各研究室のいわゆるゼミナールに、大学1年生からゼミナールに受け入れているので、中高生、高校生ですね。端的に言うと高校3年生ですけど、ゼミに受け入れていました。そういう意味では、そういうことすら考えて高大連携してもいいのですが、まずはその前提条件として、せっかく府立市立で素晴らしい学校があり、しかも一色ではない、いろんなそれぞれの特徴のある学校が今めきめきと力をつけている。そういうところが府市それぞれの個性である。市立でも堀川という個性もあれば、西京という個性もあれば、開建という個性もあって、市立の中でももちろんそういう交流をしなければならない。府立のことなので私は個別に上げませんが、府立はまた素晴らしい個性がそれぞれある。ちょうどその学校をまたがって、さらに探究型を進めるというのを具体的に何かできれば、府立市立がお互いもっと魅力がアップし、それは大学に繋がっていく。もっと言うと、さっき言ったように受験勉強で少しくリエイティブな活動についてのモチベーションが下がる、あるいは就職活動で従来型の就職活動で下がるのではなくて、リニア（一直線）にそのクリエイティブな活動に対するモチベーションを上げていくというのが京都で行われていけば、これは必ず京都の経済のさらなる活性化に繋がっていく。そうするとそういう若い人材を取るためにも、やっぱり京都で企業立地しよう、拠点を置こうということになると思うので、これはぜひお考えいただけますでしょうか。

○西脇知事

松井市長の提案に全面的に賛成ですし、今高大連携の話もありましたけど、やっぱり先ほど紹介されたように、最近就活が早くなっているため、何となく高校でクリエイティブな思考が止まるのです。だから、それをできる限りシームレスにすればよりクリエイティブの人材にできるということは、高大連携でもいいです。それから、もう1つは、そこにさらに京都は産業界もかなりレベルの高い企業がありますから、そこに産業界を巻き込んだようなことまでやれば全国初の試みになるのではないかと。ただ、そのためには、前提となる府立高校と市立高校が一緒になって連携するというのは非常に素晴らしいことだし、これは私も是非ともお願いしたい。

しかし、教育委員会もありますし、今年度は始まったばかりなのですが、それでもまだ年度始まったばかりなので、今さっきの探究学習というのは、多分こういう連携が一番向いているし、いろんなやり方があると思うのですが、是非とも各高校がどういところでどうやるかというのを教育委員会で詰めてもらわないといけません。一

緒になって研究発表をすとか、同じ人の話を一緒に聞いて意見交換をすとか、そういう場をまずは令和6年度からスタートできれば、そのあとにも繋がるし、高大連携から産業界を巻き込むと時間がかかるかもしれませんが、まずは府立高校と市立高校の連携については是非ともやりたいと思うので、よろしくお願いします。テーマとしてどんなものがあるか、もしちょっとあればお願いします。

○松井市長

私が個別具体的に言って良いか分かりませんが、やっぱりある程度、さっき STEAM と言いましたので、理数系でなんか素晴らしいサイエンティストとかエンジニアは京都にたくさんおられますから、そういう人を招いて、生徒の創造性をかき立てるような探究型のテーマというのもあるでしょう。あるいは、やっぱり京都というまちは、私はこの文化というのは、交じり合うのが京都のまちだと思うので、そういう相互のコミュニケーション教育ということを実現するため、例えば、対話型のトレーニングをするワークショップをやるとか、過去にもこれは単発ではありますが、京都市立でも堀川なんかでそういう教育をやって、成果を上げたというのもあるので、できれば単発ではなくて、継続的に実施ができるような形でですね。これは両教育委員会と、もっと言うと両教育委員会が仲立ちをした上で、やっぱり複数の学校の熱意ある先生方が「具体的にこんなことをやりたい」という提案をしていただいて、それを両教育委員会でしっかり議論していただいて、トップミーティングでこうやって話をというのも素晴らしいし、今日も知事がすごく受けとめていただいてありがたいのですが、やっぱりそれは現場に1回おろして、現場から「こんなことやってみたい」という希望を聞くというプロセスも、プロセスというか熱心な先生方が府立市立を越えて話をすということ、そのこと自体がすごく価値がある。こうやって先生方が熱心な話をしていただいて、生徒さんの意欲を駆り立てるということがすごく大事だと思うので、僕はそういう対話型の、例えば演劇教育なんかもそうでしょうし、そういう理数系の方もそうですし、意外と大事だと言われているのは、海外の人が来たときに、京都は京都の哲学・京都の思想があり、なかなかそういうものを今は学校の現場では教える時間がなくなっている。そういうものに触れるというのは、Aというのも広くアートだけではなくて、思想性とか哲学とかそういうことも含めたら、面白いと思います。

○西脇知事

スティーブ・ジョブズは「京都は文化首都じゃなくてキャピタル・オブ・スピリチュアル」と言っていますので、まさにそういうことだと思います。

ちょっと時間がきておりますので、進め方の後、後半は2人でフリートーキングしたのですが、それぞれのテーマについては、今後、このトップミーティングを進めていく上での一つの足がかりとさせていただくということで、そのために、特に令和6年度は一番最後に出たテーマですが、教育関連での新たな府市共同事業ということで、最終的には高大連携とか産業界等に行きますけど、当面は令和6年度については、府

立高校と市立高校で行うジョイント事業、ちょっとこれ名前をどうつけるかということはあるんですが、要するに高校生の探究のパートナーシップみたいなものを導入していこうということで、両教育委員会の方にそれぞれおろした上で、具体化をしてもらおうということを是非ともお願いしたい。

それからさっき私が最初の観光のところで申し上げましたけれども、京都西山と竹の里・乙訓のモデルツアーを受けた商品ができていますので、ここはもうそれが始まっています。それ以外の何か良いモデルツアーがあれば周遊観光として是非とも実現するというところで。

○松井市長

うちの今年度の重点で山科・醍醐というのがありますが、さっき言っていたのですが、そういうのも含めて（西脇知事：それも宇治までも含めて）。それからもちろん、おっしゃった京北・美山というもの、これもすごく素晴らしいと思う。具体的に何か周遊というコンセプトでキャッチフレーズはそれぞれのものをどうするかというのはもちろんあるけれど、それよりも何か共通のムーブメントを起こすということがこの会らしいと思います。

○西脇知事

ぜひとも今までは「「とっておきの京都」と「もうひとつの京都」の連携」という（キャッチコピーが）なにか喋ると長いので、それを連携する1つのキャッチコピーか何かあればいいなと思うので、これもまた観光部局に考えてもらいたいと思います。

大体、以上で時間ですが、どちらにしても今日は第1回ということなので、この程度では終了したいと思いますが、引き続き今の話も踏まえて、是非ともご協力をお願いしたいと申し上げます。以上で終了いたします。どうもありがとうございました。